Title	シンボリック相互作用論のエッセンス
Author(s)	桑原, 司
Citation	Discussion papers in economics and sociology
Issue Date	2005-12-19
URL	http://hdl.handle.net/10232/4177
Rights	

Discussion Papers In Economics and Sociology (ISSN:1347-085X)

No.0501

シンボリック相互作用論のエッセンス

桑原　司

2005.12.19

The Economic Society of Kagoshima University
Korimoto 1-21-30, Kagoshima, 890-0065
Japan.

シンボリック相互作用論のエッセンス1)

桑原　司

本論は、ブルーマーのシンボリック相互作用論（以下SI）を、主として、次の観点から検討しようとするものである。1)SIにおいて、個人の「社会化」とは、如何なるものと把握されているのか、2)SIにおいて「社会」とは、如何なるメカニズムを通じて、その個人（個々人）により、形成されてゆくものと捉えられているのか、3)また、そうした社会が何故に再形成されてゆくものと捉えられているのか。検討の結果、次のことが明らかとなった。1)ブルーマーにおいて「社会化」とは、個々人が「他者たちの集団」から「定義の諸図式」と「一般化された諸々の役割」という「二つの枠組み」を獲得し、それらの枠組みに自らの解釈・定義が方向づけられること、と捉えられている。2)ブルーマーにおいて、「社会」とは、相互作用へ参与者達が、互いに、「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」という「二つの観点」を正確に把握し得たときにのみ可能となるもの、と捉えられている。3)ブルーマーにおいては、「他者」という存在が持っている「不可視」性が故に、その他者（たち）に相対する個人は、絶えず自らの解釈・定義の変容を迫られざるを得ないことが、社会というものを絶えず再形成され続ける存在として捉えなければならない、その理由となること。以上の三点が明らかになった。また最後に、上記の人間観・社会観をもとに、ブルーマーのSIの研究手法（「行為者の観点」からのアプローチ）に対する批判的な検討が試みられた。すなわち、a)「行為者の観点」からのアプローチを行うに際しては、その「行為者」には「個人」のみを含めるべきであること、b)研究者が把握する「行為者の観点」とは、決して「行為者の観点」そのものではあり得ず、あくまで研究者による“構築物”の一種でしかあり得ないこと、この2点が明らかにされた。以上のa)b)を踏まえた上で上記の人間観・社会観を経験的に検証することが今後の重要な課題のひとつとなることが最終的に確認された。

序章　問題の所在

いわゆる、シカゴ・ルネサンスの一翼を形成する、ハーバート・ブルーマー(Blumer,Herbert George,1900-1987)のシンボリック相互作用論(Symbolic Interactionism)が、T.パーソンズを中心とする構造機能主義社会学や、G.A.ランドバーグを中心とする社会学的実証主義（操作主義）を批判し、それに代わる分析枠組みや研究手法を発展させようとしたことは良く知られている。とりわけ、その分析枠組みに関しては、これまでのわが国の研究においては、それが提示する「動的社会」観が高く評価されてきた。すなわち、社会を、「主体的人間」（船津　衛）によって、形成・再形成される「流動的な過程」ないしは「変動的」「生成発展的」なものと捉える、そうした社会観が高く評価されてきた。本論は、ブルーマーのシンボリック相互作用論が持つ、分析枠組みと研究手法というこの二つの側面のうち、主として、前者の側面に焦点を当て、論を展開しようとするものである。すなわち本論は、ブルーマーのシンボリック相互作用論が持つ、「動的社会」観なるものの見方の内実を検討することをその目的としている。

では、如何なる観点から、その検討を行うのか。本論では、シンボリック相互作用論において「個人と社会との関係」が如何なるものと把握されているのか（ないしは論理上、如何なるものと把握され得るのか）、そうした観点から、この社会観を検討しようとしている。より具体的に述べるならば、本論は、以下の三つの問いを、ブルーマーのシンボリック相互作用論を素材として、解明しようとするものである。

1）シンボリック相互作用論において、個人の「社会化」(socialization)とは、如何なるものと把握されているのか。

2）シンボリック相互作用論において「社会」(society)とは、如何なるメカニズムを通じて、その個人（個々人）により、形成されてゆくものと捉えられているのか。

3）また、そうした社会が何故に再形成されてゆくものと捉えられているのか。

言うなれば、本論は、ブルーマーのシンボリック相互作用論のパースペクティブから「社会学の根本問題」を解こうとするものである。というのも、これまでのブルーマーのシンボリック相互作用論に関するわが国の諸研究においては、まさにこの根本問題を念頭においた研究が充分になされてこなかったと捉えられるからである。

なお、如上の目的を遂行する上で、看過してはならない重要な論点がある。それは、個々人が社会化されるそのメカニズムとは如何なるものなのか、個々人が社会を形成するそのメカニズムとは如何なるものなのか、そして、そうした社会が何故に再形成への扉を開くものと捉えられなければならないのか（その論理的必然性とはどのように説明されるのか）、この三つの問いを、ブルーマーのシンボリック相互作用論の概念的柱石となっている「自己相互作用」(self-interaction)概念との確固たる結びつきのもとに明らかにしなければならないという論点である。すなわち、本論は、この自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに、上記の三つの問いを解明しようとするものである。

第１章　自己相互作用と行為

まず第１章においては、主として、上記の問い１）の解明が企図されている。またそれに付随して、ブルーマーにおける「個人と世界との関係」把握、ならびに、「行為」把握の解明が企図されている。ブルーマーのシンボリック相互作用論において、その概念的柱石となっている「自己相互作用」とは、ブルーマーによれば、「自分自身との相互作用」(interaction with oneself)とも言われ、それをブルーマーは、「文字どおり、個人が自分自身と相互作用を行っている過程」であるとか、「個人が自分自身に対して話しかけ、そしてそれに対して反応する、というコミュニケーションの一形態」であると表現している。すなわち、他者との間で行う社会的相互作用を自分自身と行うのが、換言するならば、他者との社会的相互作用を個人の内に内在化(internalize)させたものが、ブルーマーの言う「自分自身との相互作用」すなわち「自己相互作用」に他ならない。またこの概念は、ブルーマーにおいては、「表示」(indication)と「解釈」(interpretation)からなる「解釈の過程」(process of interpretation)と同義で用いられているものである。かねてより、彼の自己相互作用に関する立論に関しては、それが「社会化」(socialization)に関する議論を看過した「主観主義」的なものである、との批判が提示されてきたが、本章は、そうした批判に対する反論としての位置づけも有している。

自己相互作用概念を軸とする、ブルーマーのシンボリック相互作用論において、「社会化」(socialization)とは、他者との社会的相互作用を方向付ける「定義の諸図式」(schemes of definition)と、自己との相互作用（自己相互作用）を方向付ける「一般化された諸々の役割」(generalized roles)という二つの解釈枠組みを、個人が、自己を取り囲む「他者たちの集団」(groups of others)から獲得し、そうした枠組みに、自らが営む相互作用における解釈・定義を方向付けられること、と捉えられている。ブルーマーにおいて、解釈・定義とは、一般化された諸々の役割の獲得→定義の諸図式の獲得→一般化された諸々の役割に方向付けられた自己相互作用における定義の諸図式の吟味→その吟味の結果、修正・確定された、新たな定義の諸図式に基づく外界の知覚(perception)、という一連のプロセスと捉えられている。このプロセスこそ、「意味付与」(confering of meaning)と呼ばれる営みに他ならない。

なお、上記において外界とは、ブルーマーにおいては、「現実の世界」(world of reality)

を意味し、ブルーマーにおいて「人間」とは、そうした現実の世界（社会的・物的環境）に取り囲まれた存在と捉えられている。人間は、上述の意味付与の営みを通じて、この世界から、自らにとっての「対象」(object)を形成する存在と捉えられている。なお、ブルーマーにおいて「意味付与」とは、ある一定の「パースペクティブ」(perspective)に基づく「知覚」と同義のことと捉えられている、という点をふまえるならば、「対象」とは、そのパースペクティブによって人間が捉えた、現実の世界のある一定の部分であるとも表現できる。ブルーマーは、この「対象」を、「物的対象」(physical object)、「社会的対象」(social object)、「抽象的対象」(abstract object)の三つに大別している。

人間にとっての「世界」(world)とは、こうした「対象」からのみ構成されるものと捉えられ、人間はこの意味での「世界」の中に住んでいる。その意味で、ブルーマーにおいて「個人と世界との関係」とは、人間による世界（現実の世界）に対する自己相互作用を通じた解釈・定義（意味付与／知覚）によって定められるものと捉えられていることになる。

とはいえ、ブルーマーにおいては、個人と世界との関係が、人間による世界に対する一方的な解釈・定義によって決定されるものと捉えられているわけではない。なぜなら、解釈・定義されるその世界、すなわち現実の世界には、いつでもそうした解釈・定義に対して「語り返し」(talk back)してくる可能性が存在するものと捉えられているからである。また個人は、その「語り返し」を契機として、自らの解釈・定義の妥当性の如何を知ることが出来、その結果として、自らの解釈・定義を修正することになる。したがって、ブルーマーにおいて、個人と世界との関係とは、個人による世界に対する解釈・定義によって一義的に決定されるものと捉えられてはならない。ブルーマーにおいて、個人と世界との関係とは、個人による世界に対する解釈・定義と、世界からその解釈・定義に対して寄せられる「語り返し」との絶え間ない相互作用を通じて、絶えず形成・再形成されるものと捉えられなければならない。

こうした「個人と世界との関係」把握をふまえた上で、では、その個人の「行為」(action)とは、如何なるものと捉えられるのか。ブルーマーにおいて行為（「個人的行為」(individual act)）とは、まず何よりも、現実の世界に対する「適応」(fit,adjust)活動と捉えられており、それは、現実の世界からの語り返しを契機とした、絶えざる形成・再形成を余儀なくされるものと捉えられる。ブルーマーはこの「行為」を、「衝動」(impulse)→「知覚」(perception)→「操作」(manipulation)→「完結」(consumation)という一連のプロセスからなるものと捉えているが、上記の「個人と世界との関係」に関する知見をふまえるならば、このプロセスは、「衝動」→・・・・→「完結」で完結するものとしてではなく、「衝動」１）→・・・・→「完結」１）→「衝動」２）→・・・・→「衝動」ｎ）と絶えず継続して行くものと捉えられなければならないことになる。

第２章　相互作用から社会へ－－形成されるものとしての社会－－

続く第２章においては、上記の問い２）の解明が企図されている。ブルーマーのシンボリック相互作用論においては、上記に論じた「行為」が、個々人間において、相互に取り交わされている場合、それは「社会的相互作用」(social interaction)と呼ばれ、それをブルーマーは、「自己相互作用」の介在しない「非シンボリック相互作用」(non-symbolic interaction)と、「自己相互作用」の介在する「シンボリックな相互作用」(symbolic interaction)の二

つに大別している。その上でブルーマーは、前者の相互作用を、ミードの言う「身振り会話」(conversation of gestures)と、そして後者の相互作用を、ミードの言う「有意味シンボルの使用」(use of significant symbols)と同義なものとしている。とはいえ、本章での議論の結果、後者の相互作用には、より正確には、未だ「有意味シンボル」が成立していないものの、相互作用に参与している個々人が、各々自己相互作用の営みを通じて、有意味シンボルを成立させようとしているシンボリックな相互作用と、成立した有意味シンボルを媒介として行われる「有意味シンボルの使用」と同義のものとしてのシンボリックな相互作用、という二つのシンボリックな相互作用が含まれていることが明らかにされた。ブルーマーにおいて、「社会」(「人間の社会」(human society))とは、シンボリックな相互作用の「本来的形態」(real form)からなるものと捉えられ、その相互作用を、ブルーマーは、「ジョイント・アクション」(joint action)ないしは「トランスアクション」(transaction)と呼んでいる。実は、この本来的形態としてのシンボリックな相互作用こそ、上記の「有意味シンボルの使用」と同義のものとしてのシンボリックな相互作用に他ならない。いわば、ブルーマーにおいて、社会とは、そうしたジョイント・アクションが、通時的共時的に相互に折り重なったものと捉えられている。その意味で、ブルーマーにおいては、このジョイント・アクションとは、社会の「基本的単位」として位置づけられていた。

ブルーマーにおいては、ジョイント・アクションの形成は、シンボリックな相互作用においてなされるものと捉えられている。すなわち、シンボリックな相互作用を通じて、その本来的形態であるもう一つのシンボリックな相互作用(ジョイント・アクション)が形成されるものと捉えられている。ここでシンボリックな相互作用とは、ブルーマーにおいては、ある「身振り」(gesture)の提示と、その身振りの「意味」(meaning)に対する一つの反応と定式化されている。さらに身振りは、それを提示する者と、それが向けられる者との双方に対して意味を持ち、両者に対して身振りが同じ意味を持つとき、両者は相互に理解し合っている、とブルーマーにおいては捉えられている。この「相互に理解し合っている」状態とは、ブルーマーにおいては、個々人の間に、「有意味シンボル」(significant symbol)ないしは「共通の定義」(common definition)が成立している状態を意味している。また有意味シンボルが成立している状態とは、より正確には、個々人が、各々の自己相互作用を通じて、そこで提示されている身振りに対して、同一の意味を付与している状態を指していた。ジョイント・アクションは、この有意味シンボルないしは共通の定義が成立することによって可能になるものと、ブルーマーにおいては捉えられている。そうした共通の定義は、個々人が、自己相互作用の一形態としての「考慮の考慮」(taking into account of taking into account)を駆使しつつ、互いに「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」の双方を適切に把握(想定/解釈・定義)したときにのみ成立するものと捉えられている。また、個々人による、そうした二つの観点の適切な把握は、その個人が、自己を取り囲む「他者たちの集団」から、前もって、種々の解釈の道具(「定義の諸図式」、「一般化された諸々の役割」)を獲得し、そうした道具によって、その解釈・定義を方向付けられることにより可能になるものと、ブルーマーにおいては捉えられていた。また、個々人により作り出されたこの共通の定義によって、ジョイント・アクションは、その規則性・安定性・再起性を保障される、とブルーマーにおいては捉えられていた。

第３章　再形成されるものとしての社会

第３章においては、上記の問い３）の解明が企図されている。ブルーマーは、一方で、社会というものを、個々人により作り出された「共通の定義」によって、その規則性・安定性・再起性を保障されるものと捉えつつも、他方で、社会を、多くの不確定の可能性にも開かれているものと捉えている。すなわち、不確定性や偶然性や予期せぬ変容が、社会というもの（ジョイント・アクション）が持っている、その重要な特徴として認識されなければならないことを、ブルーマーは強調している。では、何故にそう考えなければならないのか。こうしたことを、「自己相互作用」概念との確固たる結びつきのもとに明らかにするということは、すなわち、自己相互作用概念との確固たる結びつきのもとに、社会を構成するジョイント・アクションの規則性・安定性・再起性が維持され続けるということが、事実上、不可能なことであると言うことを明らかにすることを意味する。換言するならば、共通の定義が維持され続ける可能性が存在し得ないことを、自己相互作用概念との関わりのもとに明らかにすることを意味する。

ブルーマーにおいて、「共通の定義」が維持されている状態とは、すなわち、個々人の間に「有意味シンボル」が維持されている状態を意味していた。また、その状態をブルーマーは、「ある身振りを提示している人間が、その身振りが向けられている他者と同じように〔同じ見方で〕自らの身振りを見ている」状態と捉えている。こうした状態が維持され続けるためには、身振りを提示している人間は、その身振りが向けられている他者を、ある一定の見方でその身振りを見ている他者として、自己相互作用を通じて、解釈・定義し、かつそうした解釈・定義が妥当なものであり続けなければならない。ところが、そうしたことを不可能にする特性が、この他者にはある。

先に本論第１章で明らかにされたように、ブルーマーにおいては、ある個人を取り巻く「世界」(world)とは、その個人にとっての「対象」(object)からのみなるものと捉えられている。それ故、個人とっての「他者」という存在もまた、その個人にとっての「対象」の一種として位置づけられていることになる。ところで「対象」とは、先にも論じたように、個人がある一定のパースペクティブにしたがって知覚した（すなわち、自己相互作用を通じてある一定の意味を付与した）、「現実の世界」のある一定の部分を指すから、「対象」とは、一方で個人によって知覚されたものであると同時に、他方で「現実の世界」のある一定の部分でもあり続ける、ということになる。同様に、「他者」という存在もまた、一方でその個人によって知覚されたものであると同時に、他方で、「現実の世界」のある一定の部分でもあり続ける、ということになる。では、その「現実の世界」とは如何なる特性を有するものと捉えられていたのか。先に第１章で明らかにされたように、「現実の世界」とは、個人によるその世界に対する解釈・定義に対して、いつでも「語り返し」してくる可能性を持った存在と捉えられていた。また個人は、その「語り返し」を契機として、自らの解釈・定義の妥当性の如何を知ることが出来、その結果として、自らの解釈・定義を修正することになる。さらに、そうした「語り返し」が生じる可能性がいつでもあるが故に、個人が、ある一定の解釈・定義を、妥当なものとして用い続けることは、事実上、不可能なことと捉えられなければならないことになる。ある個人にとっての「他者」という存在もまた、その現実の世界の領域に位置するものであり、それ故、個人が、その他者に対して行ったある一定の解釈・定義を、妥当なものとして用い続けることもまた、不可

能なことと捉えられなければならない。他者が持つこうした特性を指して、本論は、他者の「不可視」性と名付けた。

以上ここまでの議論を踏まえるならば、次のように結論づけることができる。すなわち、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては、「共通の定義」なるものが永久に維持され続けるということは、事実上、不可能なことと捉えられなければならない。何故なら、共通の定義が維持され続けるためには、身振りを呈示している人間は、その身振りが向けられている他者を、ある一定の見方でその身振りを見ている他者として、「自己相互作用」を通じて、解釈・定義し、かつそうした解釈・定義が妥当なものであり続けなければならないが、解釈・定義されるその他者には、いつでもそうした解釈・定義に対して「語り返し」する可能性がある、という特性があり（他者の「不可視」性）、それ故、そうした解釈・定義が修正されなければならない可能性がいつでも存在しているからである。

終章　経験的研究へ向けてーーシンボリック相互作用論の研究手法の批判的検討ーー

終章においては、第１章、第２章、第３章で明らかにされた、ブルーマーの「動的社会」観を、経験的に検証する検証手段としての、「行為者の観点」(standpoint of the actor)からのアプローチについて、議論が割かれている。

本論第１章、第２章、第３章で明らかにされたのは、ブルーマーのシンボリック相互作用論のパースペクティブから捉えた「動的社会」観の内実であるが、極言するならば、「シンボリックな相互作用としての社会」(society as symbolic interaction)というブルーマーのよく知られた表現からも分かるように、ブルーマーにとって「社会」とは、まず何よりも、人間間の社会的相互作用（その本来的形態がトランスアクションでありジョイント・アクションであった）が折り重なったものとして捉えられていた。したがって、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては、社会的相互作用とは、社会の基本的単位に他ならず、それ故に、その基本的単位である社会的相互作用（トランスアクション／ジョイント・アクション）を研究すれば、「人間の社会」(human society)というものが持つ、それ特有の性質が明らかになる。これが、ブルーマーがシンボリック相互作用論という立場から立てた社会に対する仮説であった。本論第１章、第２章、第３章の諸議論により明らかにされた社会的相互作用把握を提示するならば、それは次のように捉えられる。すなわち、社会的相互作用とは、そこにおいて、互いに相手が不可視的な存在となっている個々人が、各々の自己相互作用の一形態としての「考慮の考慮」を駆使しつつ、互いに「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」の双方を探り合う（定義し合う）過程である、と捉えられる。すなわち、そこにおいて、個々人は、「考慮の考慮」を駆使しつつ、相手がどのような観点を持った存在であるのか（「相手の観点」）、また相手から見て、自分自身はどのような観点を持った存在と捉えられているのか（「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」）という、この二つの事柄を絶えず想定（解釈・定義）し合わなければならない、そうした過程として社会的相互作用を把握することが出来る。また互いに相手が不可視的な存在となっているが故に、必然的に個々人は、再定義を余儀なくされるのであり、それ故に、その相互作用は絶えず進展を余儀なくされる。これが、本論から得られた社会的相互作用把握であった。ところで、ブルーマーのシンボリック相

互作用論より得たこの社会的相互作用把握は、彼の方法論においては「感受概念」(sensitizing concept)の範疇に入るものであり、それ故、当然この相互作用把握は、そこより演繹的に理論を構成してゆくその前提として自明視・絶対視されるべきものではなく、その妥当性を個々別々の経験的世界の個々別々の事例に照らして、そうした個々別々の事例が持つ、個々別々の独自性を引き出すという形で、検証されなければならないものとなる。

ブルーマーは、社会科学のとるべき理想的検証方法として、「自然的探求」(naturalistic inquiry)法を提唱しているが、それは、ブルーマーによれば、「研究の指針となる概念と経験的観察との絶え間ない相互作用」(*continuing interaction* between guiding ideas and empirical observation)を、研究者が実践することを要請するものであった。換言するならば、自然的探求とは、経験的な観察を通じて、絶えず、研究者が研究対象について抱いているイメージないしは認識を、検証・改訂してゆく営みを意味している。では、研究者は如何にして、そうした検証や改訂を行うことが出来るとブルーマーは捉えているのであろうか。換言するならば、研究者は如何にして、自らのイメージないしは認識が妥当なものであるか否かを知ることが出来るものと捉えられているのであろうか。ブルーマーはそれを、研究対象である「経験的世界」(empirical world)から研究者のイメージや認識に対して発せられる「抵抗」(resist)ないしは「語り返し」(talk back)（「否定的実例」(negative case)の発生）を手がかりとしてなされ得る、としている。

では、研究者が、上記の社会的相互作用把握（シンボリック相互作用論の「ルート・イメージ」(root images)）を分析枠組みとして採用し、その上で、上記の自然的探求を行うとすれば、その研究者は如何なる方法論的な立場に立つことになるのか。ブルーマーが提示するその立場が、上記の「行為者の観点」(standpoint of the actor)からのアプローチに他ならない。すなわち、ブルーマーによれば、シンボリック相互作用論のルート・イメージを分析枠組みとして採用し、その上で、自然的探求を行うとすれば、研究者は、必然的に、「行為者の観点」からのアプローチを行わなければならないことになるという。本論終章においては、このアプローチを実際に実行するに際して伴う、諸問題・諸留意点について議論が展開されている。

まず、「活動単位」(acting unit)に集団をも含めるか否か、という論点について。「行為者の観点」からのアプローチとは、約言するならば、研究者が、社会を研究するに際して、それを構成する「行為者の立場」(position of the actor)から研究を行うことを、換言するならば、その行為者の役割を取得することを、研究者に要請するものであった。ところで、ブルーマーにおいては、この「行為者」には、人間個人のみならず、集団もその範疇におさめられている。そのことを明示するためにブルーマーは、しばしば、「行為者」に言及するに際して、「活動単位」(acting unit)という用語を用いている。ブルーマーによれば、この活動単位に含まれているのが、人間個人であれ集団であれ、そうした活動単位の行為は、等しく、それらが行う解釈の過程の所産と捉えられなければならない。またそれ故に、そこに含まれているのが人間個人であれ、集団であれ、研究者はその「活動単位の役割を取得」するという「行為者の観点」からのアプローチを実行しなければならない。これが、ブルーマーの主張である。とはいえ、この「活動単位」に集団をも含めた場合、研究者による、その集団全体の役割取得が如何にして可能であるかについて、ブルーマーは説得的・体系的な説明を用意し得ていなかったことが、本章の議論の結果明らかにされた。議論の

結果、「行為者の観点」からのアプローチを実行するに際しては、その「行為者」（「活動単位」）には、人間個人のみを含めるべきとする結論が導出された。では、そもそも「行為者の観点」を取得する、ということは如何なる事態を意味しているのであろうか。それは、ありのままの行為者の観点をダイレクトに取得することを意味しているのであろうか。次にその点について議論が展開された。

仮に、自己と他者という二人の人間によって社会的相互作用が営まれているとしよう。本論で得られた知見を踏まえるならば、そうした相互作用において、二人は各々「自己相互作用」の一形態としての「考慮の考慮」を行いつつ、互いに「相手の観点」と「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」の双方を探り合っている。シンボリック相互作用論のパースペクティブからするならば、社会的相互作用に参与している自己と他者とは、互いに相手が不可視的な存在となっているもの、と捉えられる。それ故研究者が、そうした社会的相互作用を「行為者の観点」から明らかにしようとする際には、当然ながら、研究者は、社会的相互作用において、自己は他者の内面を、他者は自己の内面を、本当のところは把握しきれていない状態にある、という理論上の前提を方法論的な前提としても据えた上で、そうした前提に見合った調査方法を採らなければならないことになる。すなわち、ある個人の内面はあくまでその個人から引き出されなければならないのであり、その個人と相互作用を営んでいる他者から引き出されるべきものではない。とはいえ、ここで忘れてはならないことは、フィールドに調査に入る研究者という存在もまた、そのフィールドにおける一人の「行為者」に他ならないという論点である。すなわち、研究者による調査研究という行為もまた、「一つの解釈の過程」に他ならず、それ故に研究者（調査者）と行為者（調査対象者）との相互作用もまた、等しくシンボリックな相互作用の範疇に入るものと捉えられなければならないことになる。であるならば、研究者にとってもまた、その人の役割を取得しようと思っている行為者（対象者）は、不可視的な存在として存在しているものと捉えられなければならないことになる。その意味で、研究者による「行為者の観点」の取得という営みは、その観点のありのままの姿をダイレクトに取得することを意味しているわけではない。そうではなく、それは、「対象者の解釈過程に対する研究者の解釈過程」(reconstruction of constructions)でしかあり得ない。では、その解釈過程の結果として、研究者が対象者に対して適用した、その解釈・定義（「行為者の観点」に関する研究者の想定）の妥当性の如何は如何にしてはかれるのであろうか。別言するならば、研究者はその「対象者の解釈過程に対する研究者の解釈過程」を如何に対自化し得るのか。先に見たように、ブルーマーは、研究者によるそうした解釈・定義の妥当性の如何を、「経験的世界」からの「語り返し」を手がかりとして検証することが出来るとしているが、では、その「語り返し」をどう処理し、どう自らの解釈・定義を修正（→確定）すればよいのかが、先の説明では明らかにされているとは言い難い。その検証の基準を設定した上で、本論の議論より析出された社会的相互作用把握を経験的に検証することが、われわれにとっての今後の第一の課題となることが、本論の考察の結果、明らかにされた。

注

1) 先に筆者は、『社会過程の社会学ーーハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論における社会観再考ーー』（関西学院大学出版会BookPark、２０００年）において、ブ

ルーマーのシンボリック相互作用論を素材として、シンボリック相互作用論の観点から見た「個人と社会との関係」に関する理論化を試みた。いうまでもなく、「個人と社会との関係」の解明は、社会学の誕生以来今に至るまで、社会学の根本問題として位置付けられてきたものであり、この根本問題はそのままシンボリック相互作用論の根本問題でもあり続けてきた、と言っても過言ではない。以下に展開される論述は、上記の『社会過程の社会学』の要旨である。なお本要旨は、既に公刊された次の拙稿に若干の加筆補正を施したものである。桑原　司、２００１年、「東北大学審査学位論文（博士）の要旨－－シンボリック相互作用論序説（３）－－」、『鹿児島大学経済学論集』54、鹿児島大学経済学会、６９－８６頁（なお、この論文の６９－７７頁の内容は、次の文献に掲載された原稿を転載したものである。『博士学位論文－－内容の要旨および審査結果の要旨（文学・第１１集・平成１１年度授与）－－』、東北大学第４４号、２４８－２５７頁）。最後に、上記の桑原（２００１年）の表題は、公刊当時には「シンボリック相互作用論序説（３）－－東北大学審査学位論文（博士）の要旨－－」となっているが、これは筆者自身がおかした誤植である（桑原　司、２００３年、「編集後記」、『鹿児島大学総合情報処理センター広報』16、鹿児島大学総合情報処理センター、１３８頁）。